

深刻な渋滞、救助に支障

能登地震、松波総合病院DMATが帰任



帰任を報告する八十川雄図医師(左端)ら＝笠松町田代、松波総合病院

能登半島地震で被災した石川県輪島市で活動してきた松波総合病院(笠松町田代)の災害派遣医療チーム(DMAT)が5日夕、帰任した。

派遣された同病院のDMATは救急科部長の八十川雄図医師、看護師3人、事務担当者1人の計5人。2日午後3時に病院の救急車と乗用車で出発。3、4日に市立輪島病院で、八十川

医師は災害対策本部の運営、看護師3人は救急車による搬送に従事したという。



災害対策を協議するDMATのメンバーら＝石川県輪島市、市立輪島病院(松波総合病院提供)

「移動ルートは1本のみ」報告

5日は、松波英寿理事長らが5人を出迎え、現地の状況の報告を受けた。八十川医師によると、市立輪島病院に勤務していた看護師が連日の勤務で極度に疲れしており、負担を減らすことに重点を置いたという。また、同病院の災害対策本部が機能していない状況で、各部門の連絡、調整、情報の集約のノウハウを伝えてきたという。

道路の寸断で、移動できるルートはほぼ1本だったといい、八十川医師は「深刻な渋滞が活動の妨げになっていた」と述べ、一般車両の利用が人命救助や復旧作業の妨げになっていることを懸念していた。

(三輪真大)